

第26回 常民文化研究講座  
 創立100周年記念事業 日本常民文化研究所の100年

# 物質文化にみる 遠い過去/ 近い過去

— 民具研究と考古学 —



2022年12月3日(土)  
 13:00~17:30

事前申込  
 参加無料

zoom同時開催

会場

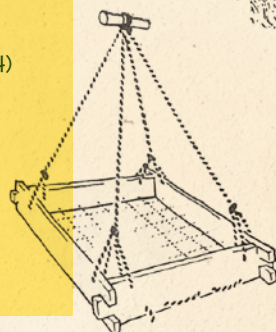
神奈川県みなとみらいキャンパス5階 5007講堂

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、開催方法が変更になる場合があります。

プログラム

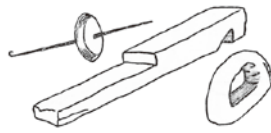
- 趣旨説明 角南 聡一郎(神奈川県立常民文化研究所)
- 基調講演 考古学からみた民具研究 櫻井 準也(尚美学園大学)
- 報告1 アチック資料と鹿野忠雄 野林 厚志(国立民族学博物館)
- 報告2 新しい時代のモノと民具研究 角南 聡一郎(神奈川県立常民文化研究所)
- 報告3 民具の実測図、考古資料の実測図 太田原 潤(神奈川県立常民文化研究所)
- 報告4 大学教育における民具研究と考古学 小島 摩文(鹿児島純心女子大学)
- 報告5 埋蔵文化財と有形民俗文化財のはざままで 岩井 顕彦(たつの市教育委員会文化財課)  
 —自治体における実践から—
- 総合討論

※内容につきましては、変更する場合がございます。



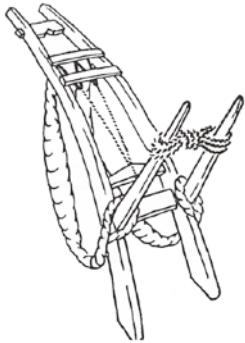
図案は『増補 ガラス瓶の考古学』『民具蒐集調査要目』『輪標(わかんじき)』より作成





# 物質文化にみる 遠い過去/近い過去

— 民具研究と考古学 —



現代社会ではデジタル化が進行する一方で、アナログな物質文化(モノ)にも注目が集まっている。人類史を語る上で物質文化は不可欠な要素であるといえる。このような中で、アチック・ミュージアムによる民具や考古遺物の収集は大きな意味を持つ。本講座では、物質文化によってわれわれの、遠い過去と近い過去の諸相に迫ろうとするものである。アチックが注目した、近い過去のモノたちは民具と称され、ミンゾク学の対象となった。一方、遠い過去の品々は考古学の対象となり、考古遺物と呼ばれるようになった。しかし

近年は、過去に収集された民具を語る人々はおらず、いわば遺物化している。考古学では、より新しい時代の資料を対象とする、近現代考古学が誕生した。両者は物質文化という大きな概念の中に包括することができる。普段はそれぞれの学問の中で調査研究されているモノを、巨視的に論じることにより、文化資源としての活用の展望や、日本常民文化研究所が、これからどのような資料を調べ考えるかが見えてくるものと期待する。本講座は、民俗学者と考古学者が向き合い、この問題を共に考え語る場である。



## 申込方法

神奈川県日本常民文化研究所Webサイト (<http://jominken.kanagawa-u.ac.jp/>) のトップページに、本講座のご案内を掲載いたします。申込みフォームよりお申込みください。追って参加のご案内をお送りします。  
※メールの受信設定は、@kanagawa-u.ac.jp、@google.comからのメールが届く設定をお願いいたします。お申し込みの際にいただいた個人情報は講座の実施・運営にのみ使用いたします。

## 申込期日

12月1日(木)12:00まで

## お問合せ

神奈川県日本常民文化研究所  
TEL:045-481-5661(代) Fax:045-413-4151  
〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1  
[jomin-kouza26office@kanagawa-u.ac.jp](mailto:jomin-kouza26office@kanagawa-u.ac.jp)

## アクセス

神奈川県みなとみらいキャンパス  
〒220-8739 神奈川県横浜市西区みなとみらい4-5-3  
●みなとみらい線「みなとみらい駅」下車徒歩約6分  
●みなとみらい線「新高島駅」下車徒歩約4分  
●JR・東急東横線・京浜急行・相鉄本線・横浜市営地下鉄「横浜駅」下車徒歩約11分  
●JR・横浜市営地下鉄「桜木町駅」下車徒歩約12分  
※駐車場がありませんので、自家用車の利用はご遠慮ください。

こちらのQRコード  
からお申込み  
いただけます。



アクセスはこちら



## 講師プロフィール

### 櫻井 準也

尚美学園大学教授  
1958年 新潟県生まれ(考古学)

『モノが語る日本の近現代生活—近現代考古学のすすめ』(慶應義塾大学教養研究センター 2004年)

『歴史に語られた遺跡・遺物—認識と利用の系譜』(慶應義塾大学出版会 2011年)

『増補 ガラス瓶の考古学』(六一書房 2019年)

### 野林 厚志

国立民族学博物館教授  
1967年 大阪府生まれ(人類学)

『イノシシ狩猟の民族考古学—台湾原住民の生業文化』(御茶の水書房 2008年)

“Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific” A. Nobayashi and S.Simon(eds.) (Senri Ethnological Studies 103) (National Museum of Ethnology 2020年)

### 角南 聡一郎

日本常民文化研究所所員  
1969年 岡山県生まれ(物質文化研究、仏教民俗学)

『タグリ神信仰と石造物の転用:仏教信仰物から民間信仰の対象への変容』『物質文化』(考古学民俗学研究 2020年)

『日式表札の成立と越境』『帝国日本における越境・断絶・残像—モノの移動』(風響社 2020年)

### 太田 原 潤

神奈川大学大学院博士後期課程  
1961年 青森県生まれ(民俗学、考古学)

『漁撈活動からみたヤマアテの初源—“絵図なき漁場図”の遊及的検討—』『歴史と民俗』38 (平凡社 2022年)

『ある種の穂摘具の系譜について—ツンペラと石匙の接点—』『民具マンスリー』第52巻5号 (神奈川大学日本常民文化研究所 2019年)

『長者久保遺跡と大平山元I遺跡における放射性炭素年代の研究史的意義』『東北日本の旧石器時代』(六一書房 2018年)

### 小島 摩文

鹿児島純心女子大学 教授  
1965年 東京生まれ(民俗学)

『サツマイモとジャガイモ—新しいイモ食』『日本の食文化 3麦・雑穀と芋』(吉川弘文館 2019年)

『鹿児島県の郷土教育のあり方』『人口減少社会・鹿児島の教育のゆくえ(新薩摩学14)』(南方新社 2020年)

### 岩井 顕彦

たつの市教育委員会歴史文化財課 主査兼学芸員  
1980年 兵庫県生まれ(考古学)

『北近畿出土弥生時代鉄鏃の再検討』『世界と日本の考古学—オリーブの林と赤い大地』(六一書房 2020年)

『兵庫県たつの市二塚地区で生産された唐箕—いわゆる「二塚系」唐箕の実態把握に向けて—』『民具マンスリー』第41巻8号 (神奈川大学日本常民文化研究所 2008年)